

1. 開催日時

平成29年10月31日(火) 14:00~16:00

2. 開催場所

独立行政法人農業者年金基金 特別会議室

3. 出席委員

・浅野幸弘 委員長 ・明田雅昭 委員 ・菅原晴樹 委員 ・枇杷高志 委員

4. 議事

- ・次期政策アセットミクス策定に向けた検討(国内債券)について
- ・運用受託機関の選定基準・評価基準の見直しについて 等

5. 概要

次期政策アセットミクス策定に向けた国内債券に係る検討状況について、事務局から説明を行った。

具体的には、ベンチマークである「野村BPI総合」の機能低下及びデューレーションの長期化による金利上昇時のリスクの増大という課題に対し、基金の運用方針の連続性に配慮し、ベンチマークとしての「野村BPI総合」は維持することとしながらも、暫定的な対応として、投資効率の改善を図る投資戦略に過渡的に移行することを提案した。

また、投資効率の改善を図る投資戦略として、日銀の金融政策の下での現状のイールドカーブの形状の歪みに着目し、投資効率の良い20年債と短期資産を組み合わせて保有し、デューレーションを「野村BPI総合」以下に抑えるバーベル戦略を説明し、これらの提案について、委員から了承をいただいた。

前回8月の委員会で事務局から提案した「自家運用の投資年限の長期化」や「規模拡大(「野村BPI総合」によるインデックス運用を行っている外部運用を自家運用に振り向け)」については、現行以上に保有債券の長期化や規模拡大を行うことについてはより慎重な検討が必要であり、特に今後の金利上昇が懸念される現局面では現状維持が妥当であると整理し、提案を取り下げることが報告した。

運用受託機関等の選定基準・評価基準の見直し案について、事務局より説明を行い、概ね了承された。委員からのご指摘については、事務局にて文言等の修正を行い、修正案を再度委員に確認いただくこととなった。

なお、今回の議事についての委員からの主な意見等は以下のとおり。

<主な意見等>

- 提案のあった国内債券についての投資戦略は、金利上昇に備えつつも、金利が変化しなかった場合でも不利にはならない戦略であり、よく整理されているのではないかと。
- 現行の自家運用の規模が国内債券の約半分を占めている点は、ちょっと多いようにも思うが、制度の連続性に配慮すれば、現行制度を維持するという判断は妥当であろう。
- 今回事務局が整理をした自家運用の考え方については、委員会でも了承をしたので、今後方針を変える検討を行うような場合は、制度の基本的考え方に立ち戻って検討をしていただきたい。
- 運用受託機関等の選定基準・評価基準案については、「内部統制に係る外部監査を定期的に受けていること」は繋がず分けて記載した方がいい。また、「プロダクトのキャパシティ管理が適切に行われていること」、「最良執行のための体制が整備されていること」という項目も必要ではないかと。